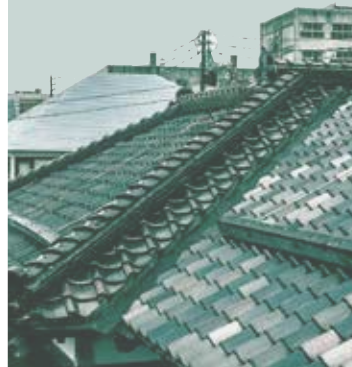


# はこだて たてものがたり

山内一男 / NPO法人はこだて街なかプロジェクト



## 北洋の活気伝えて / 小森家住宅店舗 (函館市弁天町)

函館山麓から港に至る函館の旧市街・西部地区に、旧函館区公会堂をはじめとする国指定重要文化財の建物と並んで、歴史的町並みを築き上げた市井の人の建物がある。「上下和洋折衷」と呼ばれる独特の建築様式を持つ住宅や店舗である。

1901(明治34)年に建てられた小森家住宅店舗もその一つ。西部地区の建物は1907(明治40)年の大火でほとんど

が灰と化したのが、現在「弁天町」と呼ばれるこの一画だけが火災を免れた。家主の田中仙太郎は、海産商を営みながら奥の2階を貸間としていたという。貸間を有した店舗付き住宅は希である。1階は大きな船具も搬出入できる「和風荒間硝子入り格子引戸」の店舗。店内からは格子越しに、通りを行きかう人の姿をうかがい知ることができ、玄関向かって右側の戸袋に雨戸

を納め、左側は帳場。商談は帳場から階段を上った2階の和室で行った。2階の洋風縦長開き窓は港を向いている。商談の客は、和室に洋風窓という時代を先取りしたデザインに目を見張ったことだろう。

### 風待ちの港から

火災の多い町ゆえか、屋根は瓦屋根。重たげな屋根の軒は、

雲形の持ち送りや軒蛇腹のシンブルな小壁で軽やかな表情になる。

田中仙太郎は日本海に面した兵庫県美方郡諸寄(もろよせ)の出身。露領・北洋漁業で好景気に沸く港町函館の活気にひかれて渡って来たのだろう。諸寄は岬がぐるりと内湾を抱え、江戸時代から明治にかけて北前船の「風待ち港」として栄えた港町だ。亡くなった船乗りを供養した寺が港を見下ろし、あらゆる路地は港へとまっすぐつながる。そんな故郷によく似た函館の一角に、田中は土地を購入したのだった。

当時の函館市は人口8万人余。1941(昭和16)年に太平洋戦争開戦で中止されるまで、露領・北洋漁業の一大出漁基地であった。

「田中仙太郎商店」は戦時中の1944(昭和19)年、海軍工事を営む「吉見海軍工業」に変わった。所有者の吉見与次郎は、

仕事を通して田中の商店と取引があったらしい。吉見夫婦は1階で暮らし、2階では引き続き貸間を営んだ。そこで暮らした中に小森圭一がいた。

小森家は岩手県二戸市北福岡の出である。圭一の父明七は函館へ移住して漁業資材の販売会社に勤めた。住まいは現在の堀川町。その後宝来町で「海龍」という旅館を営み、更に弁天町付近で「西浜旅館」を開業した。息子圭一は父を追って函館に渡り、時計店で働いた。やがて弁天町の建物を吉見海軍工業から借りて漁業資材や漁網の販売を始めた。1950(昭和25)年、小森家はこの建物を買取った。その2年後、10年間の空白を経て北洋漁業が再開され、函館の町は再び漁業関係者でにぎわい始める。

19才の田村キヨが、二戸から函館の小森家へ嫁いだのは翌53年のことである。

### 空き部屋を貸間

「忙しくて忙しくて、休みなく夜遅くまで働きました。海のそばなので、上陸した船員が頻繁に店に来ましてね」とキヨは往時の活況を振り返る。小森夫婦は1階で生活し、2階は元の所有者の吉見夫婦。戦後の住宅難の時期であり、小森家もまた空き部屋を貸間とした。

北洋に独航船が出航する時期、店の前の通りには食材や生活

必需品、作業資材などを扱う出店がぎっしりと並んだ。小森家も引戸を開け放って客を迎え入れ、隣の布団店「わたや」は布団の打ち直しに来る船員が引きも切らず。戦災で沈滞した函館のまちは、戦前の北洋漁業の最盛期を上回るほどに活気を取り戻した。雑貨屋、小さな飲み屋、銭湯などの店が立ち並び、路地には長屋が造られ、前浜には釣りをして遊ぶ子供の姿があった。やがて日ソ漁業交渉がその熱気を冷まし、北洋漁業は終焉を

迎え、西部地区の町並みの歴史の針は止まる。高度経済成長、そしてバブル経済の時期も、上下和洋折衷様式の小森家住宅店舗はそのまま残り続けた。現在は古い船の道具を扱うアンティークショップとして、羅針盤や霧笛、舵輪などがひっそりと佇んでいる。(敬称略)

※この連載は、NPO法人はこだて街なかプロジェクトのメンバーが、函館市西部地区の歴史的景観を織りなす民間建築を紹介する企画です。



函館独特の「上下和洋折衷様式」の小森家住宅店舗。店の前の人物の右が小森キヨさん



**DATA**  
 建築年 / 1901(明治34)年  
 構造 / 木造2階建て  
 延べ面積 / 275.1㎡  
 様式 / 上下和洋折衷様式、寄棟瓦葺き屋根、下見板張り外壁

写真 / FOLPHOTO 水本健人